

## 地域間異文化コミュニケーションにおける文化差認識の難しさ

丹羽, 空  
九州大学大学院人間環境学府

丸野, 俊一  
九州大学人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/20071>

---

出版情報：九州大学心理学研究. 12, pp.1-7, 2011-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# 地域間異文化コミュニケーションにおける 文化差認識の難しさ

丹羽 空 九州大学大学院人間環境学府  
丸野 俊一 九州大学大学院人間環境学院

## The Difficulty of Recognizing Cultural Differences in Cross-Regional Communication

Sora Niwa (*Graduate School of Human Environment Studies, Kyushu University*)

Shunichi Maruno (*Faculty of Human Environment Studies, Kyushu University*)

This paper argues that cross-regional communications are more difficult to recognize cultural differences than cross-national communications, by discussing how cultural differences are recognized in cross-regional communications. We review the studies which implicate that the cultural differences in interpersonal behavior cause misunderstandings in cross-cultural communications, and the studies which argue that recognition of cultural differences should be required for avoiding such misunderstanding. Previous studies focusing on cross-national communications suggest that, in order to recognize the differences, the person should feel a sense of discomfort for the differences between an expected and actual response of the other, and relate this sense to a national difference. In cross-regional communications, however, because the perceived differences are much less salient than cross-nation, implicit assumption about sharing the same culture are thought to make it difficult to relate the sense of discomfort to a regional difference. Consequently, despite of the discomfort, the person repeatedly misinterprets the other's response based on his or her own culture. Further studies on regional-cultural differences in interpersonal behavior should be called for.

**Key Words:** Regional culture, cross-cultural communication, cultural differences, misunderstanding

### 問題と目的

異文化コミュニケーションの誤解を回避する上で、相手と自分の共同体ではやりとりにおいて他者とのように関わらなければならない文化が異なることを認識する重要性が指摘されている (Chiu & Hong, 2005)。だが、異文化コミュニケーションにおいて、人が相手との文化差をいかにして認識するようになるのかについてはこれまで、「国単位の文化」に焦点がもたばらあてられてきており、「地域単位の文化」についてはほとんど注目されてこなかった。地域単位の文化がほとんど検討されてこなかった背景には、他者との関わり方についての地域文化差は国の文化差よりも小さいと考えられ、それゆえ異なる地域の人との関係構築は異国の人との関係構築よりもそれほど困難ではないと考えられてきたからかもしれない。あるいは、地域単位の文化差は国単位の文化差に比べてそれほど顕著に示されにくいために、文化差の認識過程を検討するための適当な単位の文化として扱われてこなかったのかもしれない。

だが、国間よりも身近で、やりとりを行う機会が多いと考えられる地域間異文化コミュニケーションにおいても、文化差がいかに認識されるようになるかという問題は、異文化コミュニケーションにおける誤解が関係構築

の足かせの1つとなること (Stening, 1979) を踏まえると、国間と同様に重要な問題として捉える必要があると考えられる。もしかすると、地域の文化差は国の文化差と比べて認識されにくいゆえに、やりとりを行う本人らは、実際には生じている誤解に気がつかないまま、地域間異文化コミュニケーションを行っている可能性も考えられる。

本稿では、地域間異文化コミュニケーションにおいて人はいかにして文化差を認識するようになると考えられるのかを論じ、地域間では国間と比べて文化差の認識が難しいと考えられることを主張する。この考えを主張することで、これまであまり注目されてこなかった地域単位の文化に焦点化し、他者との関わり方にはどのような地域文化があるのかを検討することの重要性を主張する根拠の1つになると考えるからである。本稿では第1に、人は、やりとりに関わる認知的な処理を個人に内在化されている自身の文化にもとづいて行う (e.g., Holloway, Waldrip, & Ickes, 2008) ために、このことが異文化コミュニケーションの誤解を招く原因の1つになっている可能性を指摘する。第2に、異文化コミュニケーションの誤解を回避するためには、相手との文化差を認識することが重要と考えられている文化的コンピテンス研究の考え (Chiu & Hong, 2005) と、この考えを支持する Hong・Lin

(2001)の知見を述べる。第3に、従来焦点があてられてきた国単位の異文化コミュニケーションに関する研究(e.g., Minoura, 1992)を概観し、そこでは、人は相手の関わり方に違和感を覚え、その違和感を相手と自分が育ってきた国の違いに関連づけることで文化差を認識するようになると想定されていると考えられることを指摘する。第4に、社会的推論研究からの知見(e.g., Ames, 2004)を踏まえて、国間と異なり地域間では外見上にそれほど違いがないために文化差が認識されにくいと考えられることを述べる。それゆえ、地域間異文化コミュニケーションでは、人は相手の意図や自分に対する相手の評価を自身の文化にもとづいて誤った解釈を繰り返し、この繰り返しの中でメタ認知を絶えず働かせることで文化差を次第に認識するようになると考えられることを述べる。最後に、他者との関わり方について地域文化に焦点をあてて検討している知見を概観して、どのような地域文化がこれまでに明らかにされているのかを整理する。

#### 1. 異文化コミュニケーションにおける誤解

人は個人に内在化されている文化を運用して他者とやりとりを行う(e.g., Holloway et al., 2008)のために、このことが異文化コミュニケーションの誤解を招く原因の1つになっていると考えられる。「内在化」とは文化が個人の中に取り込まれていることを指すが、それは個人が知識を単に記憶し、理解しているという意味ではなく、個人が自分自身も心からその知識を重要なものとして信じ、価値を置いていることを意味する。また、ここでの誤解とは、たとえば以下のような意図とその解釈あるいは評価とその推論の不一致を指す。A共同体には、自己卑下的な自己呈示を関係構築のための重要な対人方略とする文化があるがB共同体にはないとする。A共同体の人はB共同体の人と仲良くなるように、自己卑下的な自己呈示を行うと考えられるが、B共同体の人は、この文化を内在化していないために、A共同体の人がなぜ自己卑下的な自己呈示を行うのか分らずに訝しく思い、怪訝な反応を返してしまうと考えられる。また、B共同体の人とせつかく仲良くなると思ったA共同体の人は、B共同体の人のそのような反応に対して不快な思いをしてしまうかもしれない。

やりとりにおける文化の役割を検討している研究からは、人は内在化している自身の文化にもとづいてやりとりに関わる認知的処理を行っていることが明らかにされている。たとえば、Hollowayら研究(Holloway et al., 2008)からは、人は個人の中に内在化されている文化にもとづいて、他者とのように関わるかを決定するため、その人の関わり方にはその人が内在化している文化が反映されていることが明らかにされている。また、やりとりの相手の関わり方についての評価も、個人が内在化し

ている文化によって規定されていることが、Sanchezらの実証的研究から明らかにされている(Sanchez-Burks, Nisbett, & Ybarra, 2000)。

人が自身の文化にもとづいてやりとりに関わる認知的処理を行っている背景には、人は通常、他者とのように関わるかについての文化をやりとりの相手と共有していることを暗黙の前提としてやりとりを行い、同じ共同体の人どうしではこの前提のもとでも誤解を生じさせることなくやりとりが円滑に行えていることが考えられる。同じ共同体の人どうしでは、社会化を通して、他者とのように関わるべきかについての文化を共有している。文化内コミュニケーションでは、このような文化を双方間で暗黙的に共有しているため、お互いがお互いの関わり方の意図について実際の意図と対応する解釈を行い、お互いの評価について実際の評価と対応する推論が行える。したがって、意図とその解釈の不一致や評価とその推論の不一致といった誤解は生じにくく、他者との関わり方について相手と文化を共有しているか否かについて言語化される必要はなく、意識されることはほとんどない。

同じ共同体の人どうしでは、他者といかに関わるかについての文化の共有は「当たり前」の前提であり、その前提をもとにやりとりを行っても意思疎通に問題が生じることはない。それゆえ、人は誰かと関わるときには、「相手も当然そう考えているもの」という文化の共有についての暗黙の前提が働くと考えられる。人は「相手は、自分がなぜ相手に対してこのような関わり方を行っているのかという自分の意図を適切に汲みとってくれているだろう」と、自身の意図に対する相手の解釈を自身の文化にもとづいて推論すると考えられる。同時にまた、相手からの返しについても「自分の意図を汲みとった上でそのように返してくるだろう」と、自身の文化にもとづいて相手の返し方を解釈し、相手の自分に対する評価の推論を行っていると考えられる。

だが、自身と文化を共有していない相手はもちろん、自分の関わり方の背後にある意図を汲みとることができない。この場合、その人はその人自身の共同体で共有されている文化にもとづいて相手の関わり方の意図を解釈し、この解釈をもとに自身の文化で適切と考えられる返しを行うと考えられる。この返しを受けた相手もまた、「向こうは自分の意図を汲み取った上でなお、そのように返しているのだ」と、自身の文化にもとづいた誤った解釈が行われると考えられる。

#### 2. 誤解回避のための文化差の認識

文化的コンピテンス研究からは、異文化コミュニケーションにおける誤解を回避するためには、相手がそもそも自身と共通の文化にもとづいてやりとりを行っていない

いことを認識する必要があると考えられている。文化的コンピテンスとは、文化がそれぞれに異なる多様な共同体の中で人が適応的に活動するための必要な能力を指し、より具体的には、異文化コミュニケーションや異文化体験を心理的負担に感じることなく健康的に行い、体験できる能力を指す (e.g., Hansen, Pepitone-Arreola-Rockwell & Greene, 2000)。

Chiu・Hong (2005) によれば、異文化コミュニケーションにおいて、自身の個人的な目的を達成したり、あるいは相互の肯定的な感情を高め合ったりするといった質の高いやりとりを行うためには、たとえば、アメリカ人は自己を強く主張するが日本人はしないといった関わり方の行動上の違いに気がつくだけでなく、アメリカでは他者とは異なる固有な自分を持つことが、日本では他者との協調的な関係を維持することが重視されているという、関わり方の背後にある文化の違いを認識する必要があるという。やりとりの相手が自身の文化とは異なる文化にもとづいてやりとりを行っていることを認識することで、少なくともこれまで行っていた自身の文化にもとづく推論をしなくなり、できるだけ相手の文化にもとづいて相手の意図を解釈し、相手の評価について推論を行うようになるため、誤解を回避しやすいというわけである。

Li・Hong の研究 (2001) からは、相手の文化に関する知識の正確さが異文化コミュニケーションの質の高さと関係していることが明らかにされており、異文化コミュニケーションにおける誤解回避のための文化差認識の重要性が示唆されている。彼らは、香港在住の本土中国出身者を対象に、香港の文化についての知識の正確さを測定し、また、香港人との最近のやりとりを想起させてその時のやりとりの質 (i.e., 自身の目的がそのやりとりで達成できたか、相互のお互いに対する肯定的な感情は高まったか) について評価させた。相手の文化についての知識の正確さとやりとりの質についての評価との間に有意な正の相関が示されるかを検討したところ、本土中国出身者で香港の文化をより正確に知覚している人ほど香港人との異文化コミュニケーションで自分の目的を達成でき、相互の肯定的な感情を高め合えたと感じていたことが示されている。このことは、自身とは異なる文化にもとづいてやりとりを行っている相手の立場から相手は自分とのやりとりをどのように捉えているのかを推論することで、不要な誤解が回避され、より質の高いやりとりが行われていることを意味している。

### 3. 国間異文化コミュニケーションにおける文化差の認識過程

では、異文化コミュニケーションにおいて、人は国単位の文化差をいかに認識するとなると想定されてき

ているのだろうか。異文化適応過程を検討している研究からは、自身の文化にもとづく相手の反応の予想と実際の違いを敏感に知覚し、この違いを相手と自分の出身国の違いに関連づけることで、文化差が認識されるようになると想定されていると考えられる。

スキーマ理論の枠組みから異文化適応過程を想定しているモデル (Nishida, 1999) では、やりとりの相手との文化差を認識するためには、相手の関わり方が自身の文化にもとづいて予想されるものとは異なることに敏感でなければならないと考えられている。Nishida (1999) によれば、人が異文化適応の過程で「カルチャーショック (Furnham & Bochner, 1986; Ward, Bochner, & Furnham, 2001; Ward & Searle, 1991)」と呼ばれる一時的な心理的不適応を経験するのは、自身がこれまで慣れ親しんできた文化にもとづいて相手の関わり方を解釈しようとしてもそれが困難なために認知的葛藤が生じるからであるという。認知的葛藤には心理的不快感が伴うために、この葛藤状態から抜け出したいという気持ちが働いて、既存の文化に新しい文化をとりこむ調節が行われる。その結果、他者との関わり方についての認識的枠組みが再均衡化され、その結果、これまで「不適切」と認識された相手の関わり方も解釈可能なものとして理解できるようになるという。

認知的葛藤は、既存の認識的枠組みで目の前の現象が理解しがたいときに生じる認知体験であることを踏まえると、異文化コミュニケーションにおける認知的葛藤は、相手の関わり方が自身の文化にもとづいて予想されるものとは異なり、自身が持っている既存の文化にもとづいて相手の実際の反応を解釈することが難しいがゆえに生じるものと考えられる。もし、文化にもとづく予想を曖昧に行っている、相手の実際の反応が予想と違っていたのか、違っていたのであればどう違っていたかが曖昧になり、認知的葛藤が生じにくくなる。それゆえ、異文化コミュニケーションで認知的葛藤を生じさせるためには、まずは自身の文化にもとづいた相手の反応を丁寧に予想しながら実際の反応をモニタリングし、予想と実際はどのように異なるのかを比較しながらやりとりを行う必要があると考えられていると言えよう。

海外救済活動者を対象に行った Chang (2009) の縦断的面接調査では、上記の Nishida (1999) のモデルを支持する記述が見られる。海外救済活動者らは、異国で生活し始めてしばらくの間は異国の人の関わり方を自身の国の文化にもとづいて解釈を試み、「不適切」や「礼儀知らず」といった否定的な評価を行い、苛立ちや怒りを感じていたという。だが、このような葛藤を繰り返し経験することで、海外救済活動者らは、相手の関わり方は自身の文化にもとづくものではなく、相手側の国の文化にもとづいて行なわれていることを認識するようになっ

ていったという。

文化の内面化過程モデル (Minoura, 1992) では、異文化コミュニケーションにおいて文化差を認識するためには、相手と自分の関わり方の違いをまずは敏感に知覚し、さらには、この違いを自分と相手の育ってきた国の違いに関連づける必要があると想定されている。Minoura (1992) は、アメリカの文化が、アメリカに移住してきたばかりの日本の子どもたちの心の中にいかにして内面化していくかの過程モデルを、縦断的な面接調査から生成している。このモデルによれば、子どもはまず、自分がもともと住んでいた国と新しく移り住んだ国との間では他者との関わり方に違いがあることを認識し、その次に、それぞれの国での関わり方の背後にはどのような関わり方を重要とするかについての文化の違いがあることを認識するようになるという。

この過程を異文化コミュニケーションにおける文化差の認識過程に置き換えて考えると、関わり方が国によって異なることを認識することは、自身が通常行っているデフォルト的な他者との関わり方が異国では行われないことをまずは認識することを意味していると考えられる。この認識は、自身のもともとの国の文化にもとづいて予想される行動が、異国の人では見られなかったという予想と実際の違いから生じることを踏まえると、Minoura (1992) のモデルは Nishida (1999) のモデルと同様に、異文化コミュニケーションにおいて文化差を認識するためにはまず、自身の文化にもとづく予想を行いながら相手の反応を観察し、予想と実際はどがどのように異なるのかを絶えず比較しながらやりとりを行う必要があると考えられていると言えよう。また、Minoura (1992) のモデルでは他者との関わり方の国間の違いがすでに認識されていることを踏まえると、異国の人のやりとりの仕方に対して覚えた違和感は、自分と相手は生まれ育ってきた国が異なることから生じていると考えていると考えられ、この違和感を国による文化の違いに関連づけていると考えられる。

#### 4. 地域間異文化コミュニケーションにおける文化差の認識過程

では、地域間異文化コミュニケーションにおいて人はどのようにして文化差を認識するようになるのだろうか。先述したとおり、先行研究は国単位の文化に焦点をもちばらあてており、地域単位の文化についてはほとんど検討されていない。そこで以下では、社会的推論研究からの知見 (e.g., Ames, 2004) を踏まえながら、地域間異文化コミュニケーションにおいて文化差がどのように認識されるようになるのかと考えられるのかを想定する。地域間異文化コミュニケーションでは、国間に比べて外見上にそれほど違いがないために文化差が認識されにくいと考

えられる。そのため、人は相手の意図や自分に対する相手の評価を自身の文化にもとづいて誤った解釈を繰り返すと考えられ、この繰り返しの中で絶えずメタ認知を働かせることで文化差を次第に認識するようになると考えられる。

社会的推論の研究から、地域間異文化コミュニケーションでは特に「相手と自分は同じ国で生まれ育ってきたのだから、出身地域が異なるとはいえ、相手は自分と同じ文化にもとづいてやりとりを行っているはずだ」という前提が働き、この前提が文化差の認識を難しくさせていることを示唆する知見が得られている。社会的推論とは、他者の内的状態をどのようにして推論するかについての認知過程を指す。

Epley・Caruso (2008) は、社会的推論を正確に行うことを難しくさせている原因の1つに、人はまず、他者自身の視点からではなく、自身の視点から他社の内的状態を推論し始める (Nickerson, 1999; Epley, Keysar, Boven, & Gilovich, 2004) ことを挙げる。このことを踏まえると、文化の共有に関する暗黙的な想定は自身の視点から他者の内的状態を推論する自己投影的な社会的推論 (e.g., Batson, Early, & Salvarani, 1997; Boven & Loewenstein, 2003) の1つとして捉えられ、地域間異文化コミュニケーションにおいて、人はやりとりの相手の心的状態を自身の文化にもとづいて推論してしまうことが想定される。

社会的推論を適切に行うためには自己投影的な社会的推論から脱却しなければならない。だが、先行研究の知見からその難しさが指摘されており (Keysar, Lin, & Barr, 2003; Lin, Keysar, & Epley, 2010)、地域間異文化コミュニケーションでは特にその脱却が難しいと考えられる。この難しさの理由は、地域間異文化コミュニケーションにおける知覚的な類似度の高さにあることが考えられる。社会的推論の類似度一致モデル (Ames, 2004a; 2004b) では、自己投影的な社会的推論は、推論の対象となる相手と自分との知覚的な類似度が高いほどより優先的に行われると想定されている。Ames (2004a) によれば、相手の内的状態を推論するにあたり、認知的にアクセスしやすい自己投影とステレオタイプが用いられ、相手についての情報が曖昧な場合、人は相手の内的状態を正確に推論するためのヒントとして相手の自分との知覚的な類似度を用いるという。自身との類似度がどのくらい高いかに応じて自己投影とステレオタイプのうちのどちらをどのくらい優先的に用いるかを異ならせており、自分との類似度が高いと知覚すれば自己投影を、反対に、低いと知覚すればステレオタイプを優先的に用いて内的状態の推論を行うという。すなわち、自分との相手の知覚的な類似度が、自己投影的な社会的推論を行うか否かの調節的役割を果たしているというわけである。

このモデルの妥当性を実証的に検討している研究からは、既存の個人差による実際の類似度だけでなく (Ames, 2004a), 実験操作による知覚的な類似度 (Ames, 2004b) によっても社会的推論における自己投影とステレオタイプの優先度が異なっており、モデルが想定したとおり、類似度の高い対象に対する社会的推論は類似度の低い対象に比べて自己投影がより優勢的に用いられていることが明らかにされている。

さらに、社会的投影と呼ばれる、他者が自分と似ていると想定する認知過程は、外集団メンバーよりも内集団メンバーに対して行われやすいことが Robbins・Krueger (2005) のメタ分析から明らかにされている。Robbins・Krueger (2005) は、社会的投影が生じるためにはどういった条件が必要かというそもそもの必要性の観点から、社会的投影に関する先行研究のメタ分析を行っており、その結果からは、外集団メンバーよりも内集団メンバーに対して社会的投影が優先的に行われやすいことが明らかにされている。他者の身体的特徴は、それがたとえ誤りであっても (Olivola & Todorov, 2010)、その人物を知覚する際の主要な手がかりとして使用されるという (Blair, Judd, Sadler & Jenkins, 2002)。地域間異文化コミュニケーションでは相手の身体的特徴は自分とそれほど変わらず、また、言語についても国間ほどの違いはみとめられない。地域間では国間と比べて相手と自分との間にそれほど際立った違いが知覚されないことを踏まえると、地域が異なるだけの相手に対しては、たとえ地域文化が異なっても、同じ国で生まれ育ってきているのであれば、外集団メンバーとしてではなくむしろ内集団メンバーとして知覚されやすいと考えられる。もしそうであるならば、国文化が異なる相手よりも地域文化が異なる相手に対して、自分と類似した捉え方をしているだろうという認知がより働きやすく、それゆえ自己投影的な社会的推論がより優先的に働くと考えられる。

**文化差認識の国間と地域間の違い** 国間の異文化コミュニケーションでは、顔の彫りの深さや髪の色や目の色、言語といった相手との際立った違いが随所で知覚される。そのため、相手の反応に少しでも違和感を覚えることができれば、これらの顕著な違いがヒントになって、違和感はずぐに出身国の違いに関連づけられ、文化差が認識されると考えられる。

それに対して地域間の異文化コミュニケーションでは、顔の形や髪の色にそれほど違いがなく、文化差を認識させる外的な手がかりは極端に少ない。むしろ、知覚的には相手とのそのような類似度が高いことから「相手と自分は同じ国で生まれ育ってきているから、同様の文化を共有しているはずだ」という暗黙の前提が国間よりも強く働くと考えられる。この前提が、相手の反応に対する違和感と出身地域情報との関連づけを阻害するため、

たとえ違和感を覚えたとしても文化差がなかなか認識されず、人は相手の反応に対して自身の文化にもとづく誤った解釈を繰り返してしまうと考えられる。

**地域間異文化コミュニケーションにおける文化差の認識** だが、地域間異文化コミュニケーションでも地域文化差が認識されないというわけではないだろう。相手の意図と評価について誤った解釈と推論を繰り返す中で、相手の表情や反応までの「間」、ジェスチャーなど、さまざまな側面における相手の反応を絶えずモニタリングすることで、自身の文化にもとづく予想と実際の相手の反応の違いから違和感を強く覚えるようになって考えられる。相手と文化を共有しているという認識にもとづいて相手の反応を解釈しきれなくなれば、やりとりの中のイントネーションや地元話といった相手の出身地域情報にその違和感を関連づけるようになるのではないかと考えられる。

もし、この関連づけを行えることができれば、国間と同様に「自分と相手はそもそもやりとりにおける他者との関わり方について共通の文化を持っておらず、それゆえ、相手は自身と異なる文化を運用して自分とのやりとりを行なっている」という文化差の認識が可能になろう。地域文化差が認識されれば、人は相手との意思疎通を図るために、相手の意図と評価について自身の文化にもとづく解釈と推論を控えるようになり、その代わりに、相手の文化にもとづく解釈と推論を試るようになって考えられる。さらに、そうなれば、地域間異文化コミュニケーションにおける双方間の意図とその解釈、評価とその推論の不一致はそれほど大きなものではなくなると考えられる。

ここまでは、地域間の異文化コミュニケーションにおいて、人はいかに文化差を認識するようになって考えられるかという文化差の認識過程の想定を論じてきた。国単位の文化と異なり、地域単位の文化では相互に際立った違いが知覚されないため、知覚的な特徴を主要な手がかりとして対人知覚が行われた結果、相手は異なる地域であっても内集団メンバーとして知覚されやすく、相手は自分と似たことを考えているだろうという自分と類似した推論が行われる。そのため、地域間異文化コミュニケーションでは、国間よりも、「相手は自分と同様の文化にもとづいて自分とやりとりを行っているだろう」という自己投影的な他者推論が国間と比べてより行われやすいと考えられる。相手の反応に対する違和感と相手の出身地域情報との関連づけはこの推論によって阻害されるために、地域文化差は認識されにくいことが考えられる。だが、絶えずメタ認知を働かせ、文化共有の認識にもとづいて相手の反応を解釈しきれなくなると、違和感が地域情報に関連づけられ、文化差が認識されるようになって考えられる。

### 5. 他者との関わり方に反映されている地域文化

地域間異文化コミュニケーションでは文化差を認識することが国間と比べて難しいことを踏まえると、他者との関わり方についてどのような地域文化差があるのかを検討する必要があると考えられる。本稿では最後に、どのような地域文化がやりとりにおける他者との関わり方を規定しているのかを概観する<sup>1)</sup>。

アメリカ南部地域では、牧畜業を発生起源として現在に継承されていると考えられる名誉文化が、アメリカ南部人男性の侮辱に対する暴力的なふるまいを規定していることが明らかにされている (Nisbett & Cohen, 1996)。ここでの名誉とは男らしさやタフさを指し、名誉文化を内在化している南部人は、侮辱を自身の男らしさの名誉を傷つけるものとして認識しているという。それゆえ、アメリカ南部人は侮辱された場面においてアメリカ南部以外の地域出身者と比べてより暴力的にふるまうというのである。

日本国内では、関西地域文化が関西人のヘマ話語り方略を規定していることが明らかにされている (Niwa & Maruno, 2009; 2010)。Niwa・Maruno (2009) によれば、現在の関西地域文化は、商人中心のヨコつながりの人間関係を重視するヨコ社会を発生起源として現在に継承されていると考えられ、それゆえ、ヨコ社会で関係構築のための重要な対人方略として行われていたヘマ話語り方略が現在も重要な方略として行われているという。ヘマ話語り方略とは、相手に自分を親しみやすく思ってもらうために、自分の失敗経験を面白おかしく話す行動を指す。Niwa・Maruno (2009) の研究からは、関西人はそうでない地域以外の出身者と比べてヘマ話語り方略を自身にとっても重要な対人方略としてその価値を内在化しており、ヘマ話語り方略を行う際は、そのような価値を内在化させている自己を関与させて行っていることが示されている。

### 結 語

本稿では、地域間異文化コミュニケーションでは国間と比べて文化差の認識が難しいと考えられることを述べてきた。もしかすると、私たちが日常場面で普段行っている地域間異文化コミュニケーションにおいても、実は

<sup>1)</sup> 文化心理学では、共同体ごとの正規分布を想定し、ある基準では全体的な分布が共同体間で違いが見られることを問題にしている。本稿も同様に、共同体の中の個人差がないことは想定していないが、それでも、共同体の単位で全体的な散らばりを見たときには共同体の間には違いがあると考えている。同時にまた、まずはこの違いを認識することが、異なる共同体の人と関係を構築するための第一歩になると考えている。共同体というお互いが関連し合っている人々の集まりは、実際には多様なばらつきがあつて複雑だが、本稿では共同体間の文化の違いを簡潔に述べるために、「関西人はそうでない地域出身者に比べ…」と記述している。

誤解に気がつかないままやりとりをおこなっているのかもしれない。異文化コミュニケーションにおける誤解は関係構築の足かせとなること (Stening, 1979) を踏まえるならば、これまであまり注目されてこなかった地域単位の文化に焦点化し、やりとりにおける他者との関わり方にはどのような地域文化があるのかを今後さらに検討していく必要があるだろう。

### 引用文献

- Ames, D. R. (2004a). Inside the mind reader's tool kit: Projection and stereotyping in mental state inference. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 340-353.
- Ames, D. R. (2004b). Strategies for social inference: A similarity contingency model of projection and stereotyping in attribute prevalence estimates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 573-585.
- Batson, C. D., Early, S., & Salvarani, G. (1997). Perspective taking: Imagining how another feels versus imagining how you would feel. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **23**, 751-758.
- Blair, I. V., Judd, C. M., Sadler, M. S., & Jenkins, C. (2002). The role of afrocentric features in person perception: Judging by features and categories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 5-25.
- Boven, L. V., & Loewenstein, G. (2003). Projection of transient drive states. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1159-1168.
- Chang, W. (2009). Schema adjustment in cross-cultural encounters: A study of expatriate international aid service workers. *International Journal of Intercultural Relations*, **33**, 57-68.
- Chiu, C., & Hong, Y. (2005). Cultural competence: Dynamic processes. In A. J. Elliot & C. Dweck (Eds.), *Handbook of Competence and Motivation* (pp. 489-508). New York: Guilford.
- Epley, N. & Caruso, E. M. (2008). Perspective taking: Misstepping into others' shoes. In K. D. Markman, W. M. P. Klein, & J. A. Suhr (Eds.), *Handbook of Imagination and Mental Simulation* (pp. 295-309). New York: Psychology Press.
- Epley, N., Keysar, B., Boven, L. V., & Gilovich, T. (2004). Perspective taking as egocentric anchoring and adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 327-339.
- Furnham, A., & Bochner, S. (1986). *Culture shock: Psychological Reactions to Unfamiliar Environments*. London:

- Methuen.
- Hansen, H. D., Pepitone-Arreola-Rockwell, F., & Greene, A. F. (2000). Multicultural competence: Criteria and case examples. *Professional Psychology: Research and Practice*, **31**, 652-660.
- Holloway, R. A., Waldrip, A. M., & Ickes, W. (2008). Evidence that a simpatico self-schema accounts for differences in the self-concepts and social behavior of Latino versus Whites (and Blacks). *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 1012-1028.
- Keysar, B., Lin, S., & Barr, D. J. (2003). Limits on theory of mind use in adults. *Cognition*, **89**, 25-41.
- Lin, S., Keysar, B., & Epley, N. (2010). Reflexively mind-blind: Using theory of mind to interpret behavior requires effortful attention. *Journal of Experimental Social Psychology*, **46**, 551-556.
- Minoura, Y. (1992). A sensitive period for the incorporation of a cultural meaning system: A study of Japanese children growing up in the United States. *Ethos*, **20**, 304-339.
- Nickerson, R. S. (1999). How we know-and sometimes misjudge-what others know: Imputing one's own knowledge to others. *Psychological Bulletin*, **125**, 737-759.
- Nisbett, R. E., & Cohen, D. (1996). *Culture of Honor: The Psychology of Violence in the South*. Boulder, CO: Westview Press.
- Nishida, H. (1999). A cognitive approach to intercultural communication based on schema theory. *International Journal of Intercultural Relationships*, **23**, 753-777.
- Niwa, S., & Maruno, S. (2009). Self-denigrating humor for constructing relationships and regional cultural differences in Japan: A focus on blunder-telling behavior. *The Journal of Social, Evolutionary, and Cultural Psychology*, **3**, 133-154.
- Niwa, S., & Maruno, S. (2010). Strategic aspects of cultural schema: A key for examining how cultural values are practiced in real-life. *The Journal of Social, Evolutionary, and Cultural Psychology*, **4**, 79-91.
- Olivola, C. Y., & Todorov, A. (2010). Fooled by first impressions? Reexamining the diagnostic value of appearance-based inferences. *Journal of Experimental Social Psychology*, **46**, 315-324.
- Pearson, A. R., West, T. V., Dovidio, J. F., Renfro, S. P., Buck, R., & Henning, R. (2008). The fragility of intergroup relations: Divergent effects of audio-visual feedback in intergroup and intragroup interaction. *Psychological Science*, **19**, 1272-1279.
- Robbins, J. M., & Krueger, J. I. (2005). Social projection to ingroups and outgroups: A review and meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review*, **9**, 32-47.
- Sanchez-Burks, J., Nisbett, R. E., & Ybarra, O. (2000). Cultural styles, relational schemas, and prejudice against out-groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 174-189.
- Stening, B. W. (1979). Problems in cross-cultural contact: A literature review. *International Journal of Intercultural Relations*, **3**, 269-313.
- Ward, C. A., Bochner, S., & Furnham, A. (2001). *The Psychology of Culture Shock*. PA: Routledge/Taylor & Francis Inc.
- Ward, C. & Searle, W. (1991). The impact of value discrepancies and cultural identity on psychological and socio-cultural adjustment of sojourners. *International Journal of Intercultural Relations*, **15**, 209-224.